Memory of the Sky

漆聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｅｍｏｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｓｋｙ

【Ｎコード】
Ｎ１９６８Ｋ

【作者名】
漆聖

【あらすじ】

２１０２年。
世界は二つの国によって支配されている。
大いなる力を持つ小国イギリス。

世界で最も威厳のある大国アメリカ。
２０５８年から幾度にも起こった英米大戦。
支配されることを恐れた他の小国は、どちらかの国と同盟を結ばざるを得なかった。

そのような状況下、日本は未だにポツダム宣言に縛られていた。
だが日本の化学技術の進歩は、今では全世界のトップにまで位置するようになった。

『夜宵学院』
日本空軍附属施設。
将来、日本空軍に入隊するための教育を受ける４年制の施設である。

アマギ・ソラ（天城空）
夜宵学院２年。
日本空軍戦闘機パイロットになるべく、パイロットコースに所属。

これは、そんな一人の少女の物語・・・・・・。

～　空に染まる色　～（前書き）

小説初めてで文章おかしいかもしれませんけど
温かい目で見てやって下さい（＞＜）

～　空に染まる色　～

２１０２年。
世界は二つの国によって支配されている。
大いなる力を持つ小国イギリス。
世界で最も威厳のある大国アメリカ。

２０５８年から幾度にも起こった英米大戦。
支配されることを恐れた他の小国は、どちらかの国と同盟を結ばざるを得なかった。

そのような状況下、日本は未だにポツダム宣言に縛られていた。
だが日本の化学技術の進歩は、今では全世界のトップにまで位置するようになった。

『夜宵学院』

日本空軍附属施設。
将来、日本空軍に入隊するための教育を受ける４年制の施設である。

アマギ・ソラ（天城空）
夜宵学院２年。

日本空軍戦闘機パイロットになるべく、パイロットコースに所属。

これは、そんな一人の少女の物語・・・・・・。

Memoryl　空

鳴り響く警告音。右方向からだ。

「くっ！！」

右にめいいっぱい旋回。
しかし、警告音は止まない。むしろさっきより大きくなっている。

「なっ、なんでよ！　ふりはら……えない……！」

速度はすでに最大にまで達している。

「ギリギリまで……降下するか……。」

すさまじいスピードで急降下する。
そして、地面スレスレの地点で、

「いまっ！！」

機首を最大にまであげる。
機体はなんとか地面スレスレで飛行している。
だが、それでも警告音は止まない。
さっきよりもさらに機体との距離を縮めるミサイル。その数三。
一基は急降下でふりきれたが、残り二基はまだだ。

「もう～～～！！しつこいって！！
しつこいやつは……ってうわ！？」

前方の岩をなんとかかわす。

「しつこいやつは、モテないぞーー！！」

二基の内一基が岩に激突。
花火のように華やかに。

「よーし……。残り一基！！」

舵を上げ青空へ一直線。
両翼からすさまじい音がする。
高度が上がる。さらに上がる。

「う…うっ……！」

しかし機体にかかる圧力は想像を絶するものである。
地表から大気圏辺りまでの急上昇。
機体が耐えることができても、人間には厳しい。

「や……やば…い……。」

とうとう限界がきた。
ブースターを緩めた瞬間……。

辺り一面真っ暗。

「また……やっちゃった……。」

『ソラ！！
ったく、な・ん・で・あんたはいつもそこで急上昇するのぉ？！』

「うるさいなぁ～～～。
あたし撃墜されたんだよ？！
そこはさぁ、普通心配するもんでしょ～～？」

今度は逆から

『ハルネの言うとおり！
ソラは焦り過ぎなんだよ。
もっと気楽に考えようぜ！』

「始まってすぐ撃墜されたあんたにだけは絶対に言われたくない。」

『そ、それはだな……、その～……あれだ、あれ……。
油断……、そう！油断！！
ちょっと油断してただけなんだ！』

『戦場で油断なんてしてたら死ぬわよ。』

『ハ、ハルネまで……。』

シュー

暗かったコクピットが開く。

対空戦特殊訓練装置。
日本空軍の有する模擬戦闘システム。
気圧、酸素濃度、空気抵抗、風……等々の環境条件が完璧に再現されている。
自衛隊の方にも数台あるが主に日本空軍で活躍している。

「あのね……。ここの施設を使える回数は少ないってのに、あんたやる気あるの？！」

ソラの所へ駆け寄るハルネ。
ソラの前に仁王立ち。

身長が低いのがまぁ、なんとも可愛いらしい。

ヨミウエ　ハルネ　（詠上春音）。
日本空軍付属パイロット養成施設、通称『　夜宵学院　』。
日本空軍が管理する施設で、配属されている部門は、パイロットコース、エンジニアコース、ナビゲーションコース、オペレーションコース、メンテナンスコース等がある。
ハルネはパイロットコースに所属している。
そしてハルネの背後から

「ちゃんとしてくれよ〜〜〜。
俺もっと上手くなりたいって！！！」

キミジマ　アキラ　（君嶋彰）。
ハルネと同じくパイロットコース所属の。

二人の説教に対してコクピットの中から姿を表すソラ。
ドア付近にもたれかかっていた二人を押し倒す。
二人はそのまま地面へ落下。

ゴチーン！

すごい音が鳴ったけど気にしないでおこう。

「二人とも・・・・・・。黙って聞いてりゃ調子にのりやがって・・・・・・！！
まずは自分達がちゃんとしてくれないと何にもできないの！！
わかる？！
始まってすぐに撃墜されたアキラ！！
私の言ったとおりに全く動こうとしないハルネ！！

あんたたち……。よくもまぁ、そんなに人をバカにできたもんだわ……。
か～く～ご～～～～しろぉぉぉっ！！」
倒れている二人に容赦なくとび乗る。

アマギ　ソラ　（天城空）。
ハルネやアキラと同じくパイロットコース所属の2年生。

短く切られた茶色の髪。
肩にかかるかかからないかの瀬戸際。
その髪がふわふわとばさつく。
パイロットヘルメットをとったばかりだからか、いつもより小さく見える。

「こらぁっ！きさまたち！
早くこの場所から出てけ！！
次の生徒が来るだろが！！」

上のフロアから怒鳴る教官。
チョビヒゲ。本人はあれでカッコイイとでも思っているのだろうか。
我慢できずに笑いが出てしまう。横を見たらハルネ達も同じだった。
そりゃそうでしょ。
あれ見て笑わない方がむしろ難しい。
急いで走るが、それでも笑いは止まらない。

訓練所から出てきたと同時に、
「アハハハハッ」
大きな声で笑い出す。
もはや人目さえ気にしていない。
「あれ、あのチョビ‥‥。
アハハハハッ」
「そうね、フフッ、あれは確かに卑怯よね。」
三人のそばを通る教官たちがにらんでいる。
そんなの気にしない。
もはや止めれる人はいない。
「あぁあ。久しぶりにこんなに笑った。
なんかスッキリしちゃった。」
「スッキリした、ってあんたなんかストレスでもたまってたの?」
ソラの心配をするハルネ。
さっきまではあんだけ愚痴を言っていたが、二人はこうみえても、
親友なのだ。
夜宵学院に入学したときからの仲。
「ストレス‥‥‥‥っていうか、う〜〜〜〜ん。
なんて言うのかな?」

首を傾げハルネに近付く。
反射的に距離をおく。
なっ？！
「いやいや・・・。あたしに聞かないでよ・・・・・・・。」
「う～～～～～ん。」
腕を組み考える姿勢に入る。
「あれ？」
何かに気付いたかのように声をあげる。
「そういえばアキラわ？」
「アキラならさっき、あっちに向かって走って行ったよ？
お腹押さえてね。笑」
ハルネが指差したのは夜宵学院本館。
「あいつ・・・・・・・足速いんだ。」
「いや、私たちが気付かなかっただけ。」
静まりかえる。
顔を見合わせる。見つめ合う二人。
周りの人たちから見たら、今にもケンカをし始めそうな感じがぷんぷん漂っている。

ソラは上から目線。ハルネは下から目線。
すごい身長差。
いや・・・・・・・。ハルネが小さすぎるだけ。

「・・・・・・・っぷぷ。
ッアハハハハハハ！アハハハ！
せこいって、ハルネ！
あんたの・・・あんたの顔おもしろすぎだって！
アハハハハ！」

「そっち？！
あたしてっきり、『アキラって本当存在薄いよね～～』って言うと思ったのに！
って、それひどくない？！
人の顔をおもしろいとか。
第一あんたはね・・・・・・」

ギャーギャーわめくハルネ。
性悪女！とか遅刻女！だとか貧乳！だとか・・・・。
ソラに対する悪口が止まらない。

「ん？」

全ての言葉を聞き流そうとしていたソラだが・・・

「今・・・・・・・・貧乳って言った・・・？」

ソラの左目の下まぶたがケイレンでも起こしたのか、ぴくぴくと動く。

「ぬぅぅ！！
ハルネーーー！！！」
チャイムの音さえもかき消した。

「あんた、それだけは絶対私に言っちゃダメっ！っていうかタブー！！」
ハルネの顔に自分の顔を近づけて言った。
驚いたのか、「うわっ」っと声をあげ後ろに倒れるハルネ。
そして背を向け声を小さくして言った。

「私：けっこう気にしてるの！
言っとくけど、胸に自信はないけど、
スタイルに関しては結構自信あるんだよ？」
腰に手をあて最後の一文だけ自信満々に言う。

「第一、胸なんてものはただの飾り！
そんなものなんていらない！」
凄まじいスピードでしゃべり始めた。
でも確かにソラの言っていることに間違いはない。
身長１６２センチ。スリーサイズは上から６３・５９・８８。
女の子なら誰もが尊敬するスリーサイズ。（一番上を除く）
「あれ？」

話の勢いが止まり後ろを振り返る。
無言のまま目を大きくパチパチさせ後ろを見つめる。
左を見て、右を見て、もう一度左を見て……
何回か周りを見た後首を傾げ、「なんで？」と軽く呟くが、海を飛んでいるカモメの鳴き声にかき消され、全く聞こえない。

「ハルネわ？」

ア然と立ちずさむ。
消えたのだ。
さっきまで後ろにいた
ハルネが。

「そういえば、チャイムまだだっけ？」

学院の頂上付近に飾ってあるごくシンプルな時計。
その上には一羽の白い鳥のシンボル。
空に向かって今にも飛び出しそうな感じに、優雅に構えている。

時計に目を向け時間を確認した時、

「って授業もう始まってるーーーーっっっ。」

時計はすでに授業開始の時間から5分を回っていた。
焦って走り出すソラ。

海から吹く海風が痛いくらいに顔をたたく。
「ヤバイヤバイ」と口ずさみながらも軽やかな足どりで本館に向かう。

右側から吹きよせる海風。
その方角には青い海が広がっている。
今にも吸い込まれそうな澄み切った青。
日本で一番キレイな海らしい。

「あ、ムラサメ！」

海の手前に位置する一本の道。
そんなに大きくない滑走路である。
そして一機の戦闘機。

ＳＤＦ－Ｃ００２。
（Ｓｅｌｆ　Ｄｅｆｅｎｃｅ　Ｆｏｒｍ　－　防衛目的専用戦闘機）

通称『ムラサメ』。
日本空軍が開発した最新鋭戦闘機。
試作機００１の改良型。
今では日本空軍の主力戦闘機。
とは言っても主に自衛隊が管理している。
ムラサメが配備されている訓練校は夜宵学院のたった一校だけである。

滑走路を見つめながら、今にも落ちそうな教科書を抱え走っているが、
ガッ！
「いぃっ？！」

教科書を落とさないように注意していたソラは、前にあった段差に気付かずつまづく。

「うそ・・・・・」

ズッデーン

キレイに顔面から地面へ激突。必死にかばっていた教科書も空しくも宙に舞い、辺り一面に散らばる。

ソラは顔を地面につけたまま、お尻を上に突き上げた状態で静止。もはや乙女の見えてしまってはいけないものさえも見えている。

「う～～～。ついてないなぁ・・・・。」

地面にくっついたままの顔をあげ、その場で女の子座り。

おでこには大きな赤いたんこぶが。

「今日の運勢最悪・・・・。

占い見とけばよかったなぁ。

ラッキーアイテムとか持ってたら絶対大丈夫だったのに！」

おでこを押さえ、「痛いよ・・」などと言いながらも、周りの教科書を広い始めるソラ。

遠くにとんでいった教科書も、なんとか座ってとろうとする。

最後にはうつぶせになり地面に寝そべるような形になった。

「・・・・・・お前はバカか。」

「ん？」

うつぶせになっといる姿勢から、顔をにょき～っとあげてみせる。

「なっ？！」

驚き跳び起きる。
まるで、犬に吠えられた猫のように、２メートルはとんだだろう。
せっかく回収した教科書も、またぶっ飛ぶ。

「な、なんで・・・君が・・・ここに？・・・・」

おどおどした口調でその少年に向かって言った。
よく見れば左頬をピクピクさせているのが分かる。

「はぁ？
それ、こっちのセリフなんだけど。」

ソラの前に立っているパイロットスーツを着た少年。
髪は肩にかかるくらいの長さで少し茶色い。

「そっ、その・・・・・・。」

目は前髪にかくれているが、海のように澄み切った青色の目がたまに見える。

「今の・・・・・・見てた？」

その分目つきの悪さをなんとか隠せている。

「一部・・・始終・・・？」

身長はソラよりも高く、１７６センチ。

「ハハハ……、見てたよね……？」
しなやかに伸びた長い足。
その足がスリムな体をより一層際立たしている。
「は、恥ずかしいなぁ。」
彼の名は。
「って聞いてるの？！
ツバサ君！！」

ハヤミ　ツバサ　（早躬翼）
パイロットコース所属の一つ上の先輩。
学院一の秀才で、かつ、戦闘機の腕は全生徒の中でダントツの一位。
すでに卒業後の進路さえも決まっているらしい。

そんな天才に惚れている女がここに一人。
その名はソラ。
入学当時、彼を初めて見たときから一目惚れしたのだ。
でもなぜか周りの人には、「え？！あんな目つきの悪い人を？！」
とか、「天城……死ぬなよ。」とか「あの人全然しゃべらない
から怖いよ……。」などと言われる。
そのたびにソラはこう言っていたそうだ。
「それでも私は惚れたんです！！」
「……？」

首を傾げるツバサ。
そして、なぜか本当に口に出してしまったソラ。
その言葉を言った直後、ソラの顔から血の気が引いていき、青白くなっていくのがよく分かる。
しかし、青白くなったと思えば今度は顔を真っ赤に染め、

「どぇ～～～～～？！
いっ、今の・・・・・聞こえたの？・・・・」

「何を？」

たった一言だが、他の人たちからしたら
今にも殺されそうな感じに聞こえてしまう。

「いや！なんでもない！
うん！
なんでもないっ！」

ホッとしたソラ。
少し肩の力を抜いて軽く深呼吸。

「で、何してるのツバサ君？」

「答える必要などない。」

また一言呟き、ソラの横を通りすぎようとする、が。

「・・・・・何をしている。」

ソラよりも１０センチ程高い目線から見下ろす冷たい目。
澄み切った青がさらに見える。

「答えて！」

「断る。」

「答えなさい！」

「邪魔だ。」

ツバサが左に寄ればソラも。
ツバサが右に寄ればソラも。

「答えてっ！」

「おい、後ろ。」

「後ろ？」

何かに気付いたかのように反応したツバサ。
驚いて振り返ってみる。

「何も……ないよ？」

後ろには何もない。
見えているのは白い鳥のシンボルがある夜宵学院本館。
そして、ゆっくりと方向を戻すが、

「あれ？」

さっきまで近くにいたツバサが今でははるか向こう。
滑走路に止まっていたムラサメに乗ろうとしている。

「ちょっとーーー！！
人が話してるってのになんで無視するのよ！
ツバサ君？！いい？！
レディに対してはもっと優しく接しないとダメなんだよ！」

ツバサに向かって大声で叫ぶが虚しくも無視された。
すでにヘルメットを被りコクピットに入ろうとしている。

「ま、でも今ここで、
ごめんソラ。俺が悪かった。
って言ってくれたらぁ？
許してあげなくもないわよ？」

自信たっぷりの本人。
心の中で、『我ながら完璧なセリフ』。
腰に手をあて2、3回頷いてみせた。

「そういうレディに対して一言言わしてもらう。」

少し黙ってからヘルメット越しにこう放つ。

「お前にピンクは合わない。」

そう言ってコクピットに入っていった。

頭をフル回転させる。
今の頭の回転ならたとえ東大の問題も解けるはず。
それ程頭を使っている。
なにせ、ツバサがソラに対して言葉を発するのは本当にごく稀なことだからだ。

「……あれ？ピンク？」

自分の服を見てみるが、灰色の軍服にピンクなんてない。
ならばピンクはいったい何なのか。

「あ、そういえば。」

一滴の汗を流し、息を飲む。

「今日何色だっけ？」

全機能停止。
爆発寸前の火山のように顔が真っ赤に染まる。
温度は軽く４０度を越えてるはず。

「いやぁぁっっ！！！！！」

辺りに響く叫び声。
グランドを走っていた生徒達も空を飛んでいた鳥も驚く程に。

「どこ見てんのよっっ！！
っていうか、なんで見たの？！
ツっ、ツバサ君ってそんな人だったの？！

って聞きなさいよっ！！」

もはや聞く耳もたない。
ツバサはそのままムラサメのコクピットを閉めた。
そういえば、ムラサメのテストパイロットってツバサ君だっけ？――――――――――

突然激しい風がソラを襲う。
あわててスカートをおさえ、なぜか反射的に、

「……テイクオフ。」

青い光がはっきりと見える。
ソラはと言えば、そのまま手を空に向けて揺らし始める。
ムラサメが右に傾けば右に。
左に傾けば左に。
そんな子供のようなことを。

そうしている内にもうムラサメはみえなくなってしまった。
でもそらはそれでも左手を空に向けたまま、左やに、右に傾ける。

気付けば右手も同じことをしている。
今度は頭も、足も。
遂には、その場で躍ってしまっているではないか。

さらに鼻歌まで歌い始める。
「ラララ～♪」だとか「ルルルン♪」だとか。
よく分からないリズムで躍り続ける。
いや、舞い続ける。

その姿はまるで空の妖精。
両手を広げて回ってみせたり、軽やかに跳んで見せたり。

「あははっ！
なんか楽しい！！」

笑顔全快のソラ。
その笑顔はまさに妖精そのもの。

「次の授業いいやっ。
さぼっちゃお～っと！！」

舞いは止まらない。
本人も夢中になり周りのことなんか見えていない。
それに気付いていない。
そう。

教官達がにらんでいるということも。

Memory2　条約撤廃

「断るのだな……。」

よどんでいる会議室。
その中で響く一人の声。

「もう一度聞くぞ。
本当にいいんだな？」

円形状に配置された机。
出席者は１０人程度。
その１０人程度の人の目を見て、

「考え直すことだって出来るんだぞ？
俺は急かしているつもりはない。
ただ、本当にその決断が、あなたたち……、いや、日本人にとって正しい決断になるなのか？
一歩間違えれば日本は……。」

口を止め、机の上に置いていた震える手をさらに強くにぎりしめる。

「滅ぶぞ。」

沈黙が続く。

「くっ！
そうなってもいいと言うのか！！」

にぎりしめていた手を開き、机をおもいっきり叩き立ち上がった。
彼の目はやけに真剣で、何の迷いもない。
むしろ言っていることに、とてつもない自信を持っているように。

「それでもあんたたちはっ……。」

「大佐！」

「っ！」

「落ち着いて。」

「……すまない。」

鼻から息を出し、一口ずさむ。

「たしかに大佐の言うとおりなのかもしれん。
だがそれは『かも』の話だ！！
確率の少ないものに国を動かす訳にはいかないのだよ！！」

その横の席から、

「我々日本をあなた方の争いに巻き込まないで頂きたいねぇ。」

さらに、

「それに日本は平和だ。
今ここでアメリカと同盟を結べば、必ずや日本人の血を流すことになる。

それはなんとしても避けたいことなのでな。」
黙り込むアメリカ人大佐。
「残念だな、大佐。」
立ったまま何も言わない。
「どうかしたかね？」
「――――――――ていない。」
ようやく口を開いたかと思えば、声が小さく日本将軍たちには聞こえていない。
「何か言ったかね？」
「あなた方は分かっていない、と言ったんだ……。」
「何を？」
「もはやこれは我々とイギリスだけの問題ではないということだ！
イギリスは今やユーラシア地方すべてを支配してしまった！
なんとかアフリカは抵抗を続けているがいずれやられる！！
なのにきさまらはっ……！！」
声を張り先程よりも真剣な眼差しで話す。
言葉使いも荒くなってきている。
「ククク……、フハハハハハッ！！」

会議室一面に響き渡る日本将軍たちの笑い声。
それは何か不気味で、気持ちの悪い笑いだ。

「何がおかしい・・・・。」

「それがどうした！
我々には関係のないことだ！」

「なにっ？！」

今にもぶちギレ寸前の大佐だが、

「では一つ聞かしてもらおう。」

一人の将軍が大佐に質問をした。
もはや聞く耳すらない大佐であるが、ここは会議室だ。
礼儀はわきまえなければいけない。

「そうなった原因を作ったのは誰なのかね？」

今までずっと将軍たちの目を見ていた大佐だが、初めて自ら目を反らした。
続けて将軍は話す。

「君たちがイギリスに宣戦布告をしなければ、今はこんなことにはなっていない！
例えイギリスが世界征服を企んでいるとしても、戦争さえしなければ、世界は今のように多くの血を流さなくて済んだはずだ！
こうなった全ての原因は君たちにあるのだよっ！！」

静まりかえる会議室。
チッ。チッ。チッ。
聞こえるのは時計の針の音。
何回か鳴った後、大佐は腰を下ろし口を開いた。

「イギリスは……甘くないぞ。」

先程までの威勢はどうしたのか。
独り言を呟くように一言。
だがたしかに今、戦争が起こっている原因は、アメリカのイギリスに対する宣戦布告があったからだ。

「日本もいずれやられる。」

「ハハハハ！」

高々と笑いをもらす日本将軍。

「その心配はない、大佐。
例えイギリスが攻めて来たとしても、陸に『ガイノス』が上陸しない限り何も恐れることはない。」

※『ガイノス』
イギリスが陸海空軍の全ての軍事費を使って作り出した、歩行型奇襲戦闘兵器。
俗に言うロボットと言われるものだ。
ガイノスが開発されたせいでイギリスは一気に領土を広げた。

「それに、ポツダム条約をそう簡単に破るとも思えない。」

ポツダム条約。
第二次世界大戦後、日本の受けた対日共同宣言。
内容は、日本の領土の限定の他、日本の民主化、連合国による占領、等々。

「何の根気もなしにそんなことが分かるものかっ！
そんなのたやすく破られるに決まっているっ！」

再び立ち上がって、先程と同じ声で話す。

「お前たちは『ガイノス』と戦ったことがあるのか？！
戦ったこともないのにそんな簡単にものを言うな！」

威勢が強いものの、大佐の目は何かおびえているようにも見える。

「あれは……。
あれは悪魔だ……。
悪魔のような、破壊兵器だ！」

こんな大佐でさえもおびえてしまう。
そんな破壊兵器なのだ。

「つい最近、サウジアラビアで起こった戦争を知っているな？イギリス軍がサウジアラビアに進攻したあの争いを！
たった一日で……、たった一日で全土を占領したのだぞっ！！」

「それが何か？」

「なっ！？」

人の話を全く聞いていないかのように返事をする将軍。
その態度にそろそろ耐え切れなくなった大佐は、震える左手のこぶしをぎゅっと握る。

そしたら、その震える左手を止めるように、隣の席の少女……いや、将軍が大佐の左手をにぎった。

「落ち着きましょう、大佐。」

その声はまるで大人のようだが、可愛いげがある。
お尻の辺りまで伸びている長い髪が、少女自身の顔を包み込む。
パーマによってくるくるになっている髪で少しはまぎらわすことが出来ているが、少女の顔はごまかしようのないほど……ロリ顔だ。

「彼女の言うとおり、少しは落ち着きたまえ。
日本はあなたが心配する程、弱い国ではない。
それに、ガイノスが陸に上陸したとしても、我々には『あれ』がある。」

「『あれ』？」

大佐と隣の少女以外の将軍たちが笑い始めた。
「あれとは何だ？！」と聞きたい大佐であるが、大佐の目的はあくまで同盟締結。

「とにかく、同盟締結はしない。
すまないな、大佐。」

黙って座る大佐。

「会議は以上！解散！」

「――――――――いさ。」

後ろから呼ばれているのにも気付かないまま歩き続ける。

「大佐！」

驚いて振り返る。

人が見当たらない。

そのまま辺りを見渡すが、やはり誰もいない。

「大佐……下です。」

下を見ると一人の少女。

身長１４５センチの小柄な子。

彼女のサイズの日本空軍制服がまぁよく似合う。

体格の割には巻いた長い髪がよく目立つ。

「す、すまない。えっと……」

「内閣総理大臣ハナイ・リョウの娘、ハナイ・アゲハです。
」
背筋を伸ばし右手で敬礼。
その際、長い髪がふわっと揺れた。
「今回は父の代理として会議に参加しました。」
満面の笑み。
なぜか大佐の顔が少し赤くなった。
「今回の件については本当に申し訳ないと思っています。
アメリカから遥々日本へお越しくださったに、あんな結果になってしまって。」
「何を謝ってるんだ？
俺は気にしてない。
それに、今回の決定が日本にとって最善だというのなら、それで良いと思っている。」
急に下を向いたアゲハ。
顔を上げたと思ったらまた下を向く。
いったい何がしたいのか。
「どうかしたか？」
下を向いていた顔を覗き込む大佐。
１７９センチという長身がアゲハをさらに目立たせる。

「あの……。」

顔を上げ、

「私も大佐の言うとおりだと思うのです。
いえ、まさにそのとおりと言うべきです。」

「どういう意味だ？」

その眼差しは先程の大佐と同じ。
何の迷いもなく自信に満ち溢れた目。

「私はある組織に所属しています。
その組織の仲間からある情報を聞きました。」

「その情報とは？」

「イギリスの日本爆撃計画。」

「な、何だと……？」

一度頷き、さらに話を続ける。

「そうです。
大佐が来る３日前に、韓国に派遣した我々の調査部隊からの情報なのですが、韓国イギリス領にミサイルボットを搭載したガイノスが無数確認されました。
日本に知られないよう、韓国の廃棄された化学工事で。」

韓国は２０７８年イギリスの手によって占領された。

韓国に同盟を申し出たイギリスだが、韓国はそれを断る決断をした。
その結果、韓国本土にガイノス部隊を送りつけ、これを占領した。
韓国に住んでいる住人は今では、韓国人よも英国人の方が多くなっている。
ここで何かに気付いたかのように大佐が、

「ならばなぜそのことをみんなに知らせない！？」

たしかにそうだ。
母国が危険にさらされているということを知っておきながら、なぜ何もしないのか。

「それは……。」

大佐の目を見上げる。

「我々が極秘組織だからです。」

ドンッッ！！

突然激しい揺れがアゲハ達を襲った。

何かが爆発したような音があちらこちらから聞こえてくる。

「何だ！？これは！！」

先程の揺れに反射的に反応した大佐は、アゲハを守るような形で、自らからの腕の中に包み込んだ。

「わ、わかりませんっ。
てすがここは地下１階です！！
地下にまで響くということは地震の確率が高いですが、今だに音が止まないのはおかしいすぎます！！」

まだ止まない爆発音。
自分の腕の中に包み込んだアゲハは「きゃぁ！」とか、「いやぁ」などと叫んでいる。
そんな中。一人冷静にいる大佐。
鳴り響く音に耳を傾けている。

「アゲハ、この上には何がある？」

落ち着いた口調でアゲハに聞いた。

「この上ですか？
この上には、日本空軍が管理している『夜宵学院』が建っています。
ですが、それと何の関係があるのですか？」

バンッ！

「っち！イギリス軍め……！」

アゲハを包み込んでいた大佐の右手が横の壁を叩いた。
ビクッ、と驚くアゲハ。

「どうか……したんですか？」

今アゲハと大佐の距離はかなり狭い。
狭いというより密着している。
そんな中顔と顔の距離はかなり近い。
しかしこのような状況下、そんな事を考えてる訳がない。

「ふんっ、日本と言う国は本当に平和な国だな。
爆撃の音さえ知らないとは……。」

「ばっ、爆撃？！」

アゲハを包み込んでいた手を離し、今度は両手をひっぱって立ち上がらす。

「今でも鳴りつづけているこの音って、爆撃の音なんですか？！
でもそしたらっ……。」

後の言葉は出てこない。

アゲハ自身言いたくないだけなのかもしれない。
ここは地下1階。
そんなに被害はなく、ただ耳を容赦なく痛ぶる爆撃音のみ。
しかし、その上には何があるのかと言えば、

「あぁ・・・・。」

聞こえてくる音。
その音が暗示していること、それは、

「学院はほぼ崩壊的な被害を受けている。」

アゲハ達のいるその上には、そう。
『夜宵学院』が建ってある。
もしこの音が本当に大佐の言うように、爆撃音だとしたら、学院は間違いなく崩壊している。

「とにかくっ！
すぐに安全な場所まで避難しよう。
考えるのはそれからだ！」

アゲハの手を握り、どちらの方に進むべきか迷う大佐。

「おい！アゲハ！
早く避難通路を探そうっ！」

「は、はいっ！
確かこっち側にあったと思います！」

「よしっ！！行こうっ！！」

アゲハを引っ張って前を走る大佐。

「そういえば！
私まだ大佐の名前きいてません！！」

走りながら大佐に質問。

「教えて下さい！大佐っ！」

そういうと、アゲハの方を振り向いて、

「特殊強襲空軍部隊ラスティ・アーシュネビル大佐だ！
あらためて以後よろしく頼む！！」

Memory3　A.F.S.F.

《CリーダーよりC2へ。》

「Cリーダー、どうぞ。」

ヘルメットごしから聞こえる通信。

《すぐにポイントDへ向かえ。》

「C2、了解。」

《それと、ツバサ。
あまり感情的になるんじゃないぞ。》

「言われなくても。」

めんどくさそうに返事を返す。
それに対し軽く笑いをこぼす通信者。

《貴様の言葉遣いはいったいいつになれば良くなるのやら。》

「ふんっ。
いつでしょうね。」

そう言って通信を切った。
ツバサの目に映り始めた赤い光。
光のある場所まではまだかなりの距離がある。

今よりさかのぼること数分前。
突如韓国辺りから発射された無数のミサイルが、夜宵学院を襲撃した。
そのせいで、夜宵学院は壊滅的な被害を受けた。

「C2、ポイントD確認。
着陸体制に入る。」

なんとか着陸場所を見つけたツバサはすぐさま着陸体制にはいった。
機首をまずあげ後輪から着陸し、そのまま前輪を地につける。
何メートルか進んでから静かに止まった。

「ちっ……。」

コクピットの中から見えるのは燃え盛る火のみ。
容赦なく燃え続ける。
校舎は崩壊。
今にも崩れ落ちそうに建っている。

「C2よりCリーダーへ。
引き続き生存者捜索を行う。
以上。」

通信を切るためヘルメット横のスイッチに手をやる。

《待てっ、ツバサ!!》

「っ!!」

ツバサの鼓膜が破れるくらいの大声。

数秒間ツバサの無表情だった顔が少し変わった。
「そんなに大声出さなくても聞こ……」
《すぐに引き返せっ！！》
言葉を遮りノイズ音と共に通信が鳴る。
「なっ、何？！」
《また韓国側からミサイルが発射された！！
さっきよりも数が多い！！
迎撃を行う準備は出来ているが念のためだ！！
引き返せっ！！》
あまりにも唐突な出来事に戸惑うツバサ。
コクピットを開くスイッチに手をやったままでいる。
「どうする？」などと考えるひまさえない。
と、そのとき、
ピピ、ピピ！！
「これは？」
突然鳴り響く通信回線。
しかし今回は状況が違う。
今ツバサの乗っている戦闘機は特定の機体、戦艦、回線にしか通信は出来ない。
ましてや、戦闘機でもなく戦艦でもないところからの通信なんてありえる訳がない。

「なぜ……？」

恐る恐る回線を開いた。
と同時に、

《た……ザザ……す……ザザ…ザ……けて……》

聞こえて来たのは救援を求める声。
今にも途切れそうに、ノイズ音が混じる。

「おいっ、大丈夫か？おいっ！！」

《ザザ――――――》

返事をするが返ってこない。
聞こえるのはノイズ音のみ。

「ちっ！」

ツバサはすぐに逆探知を始めた。
通信から聞こえる人を助けるために。

《ツバサ何している！！
早くその場から引き上げろ！！》

「待て！まだ引き上げる訳にはいかない！」

《なんだと？！》

「あんたならミサイルくらい撃ち落とせるだろ！
頼みますよ、Ｃリーダー！」
《おいっ、待て！ツバサ！！》
ピッ。
Ｃリーダーとの通信回線を切った。
こちらから通信しない限り向こうから通信が来ることはない。
そのまま逆探知を続ける。
その間にもミサイルが接近しているかもしれないというのに。
「あった！でもここは・・・・・。」
示された場所は対空戦闘特殊訓練装置のある弥生学院の別館だ。
コクピットを開き外に出る。
弥生学院別館に向け走り出した。
すぐに別館にたどり着いたが、別館だからと言って被害が少ない訳ではない。
表面の壁は大きな岩がぶつかったかの如くへこんでいたり、あるところではまだ燃え続けているところもある。
このまま中に入るのはあまりにも危険すぎるが、それでもツバサは中に入って行った。
「誰かいるか！！」
辺りに散らばる瓦礫を避けながら大声で言った。
火花が噴くこともあった。

「どこだっ！！どこにいる！！」
必死に辺りを見渡すが、人がいる気配はまるでない。
諦めかけたツバサの目に模擬戦闘システムが写る。
「あの中か！！」と口ずさみながらそれに近づいていく。
「おいっ！！」
誰もいない。
「はずれか・・・・。」
今度はその隣の装置を、
「誰かい、っう！！」
酷すぎる。
中の装置が押し潰され中にいる人はぐちゃぐちゃに。
そして、最後の一個に目をやり、
「頼む！」
そう言って緊急開閉レバーを回し扉を開いた。
「おいっ！！」
中を見る。
「お、お前は・・・・！？」

中で倒れているのは一人の少女。
中の装置がもう少しで少女を押し潰してしまうところだった。
「起きろ！！おいっ！！」
その少女とは、
「おい、アマギ！！」
中にいたのはアマギソラ。
爆撃を受けた時、ちょうどこの対空戦闘特殊訓練装置の中にいたのだ。
しかし、いくら揺すっても起きない。
中から引っ張り出しその場に寝かせ、息の確認をする。
「よし、生きてる。」
ソラを抱え外に走って行く。
なんとか別館から出れたものの、ツバサはあることに気付く。
「おいおい、うそだろ？」
海の方向を見ると無数の戦闘機が。
そしてさらにその奥にも無数の戦闘機が。
そして、戦闘機と戦闘機の距離がどんどん縮まっていく。
ツバサはそれには全く気にせず、とにかく止めてある機体の方に走っていく。
ドンッ！！

爆発音がした。
すぐに爆発音のした海の方を振り向く。
戦闘機が一機撃墜された。
続いて一機。

「何やってるんだ日本空軍は！！」

機体に乗りソラを自分の前に。

「C2よりCリーダーへ。応答を願う。」

《ツバサ！！大丈夫か！？》

「はい。それと怪我人を一人保護しました。
このまま帰投します。許可を。」

《怪我人だと？！》

「頭を打っていて出血も確認しています。
幸い命に別状はありませんが、なるべく早く手当てを行うべきです。
」

《しかしだな、お前もよく分かっていると思うが・・・・・》

「分かってます。
俺に考えがあります。」

《考えだと？》

離陸体制に入り、エンジンをかけた。

機体は加速をつけ空へと上がった。
「話は後程します。それより許可を。」
《あ、あぁ。
Ｃリーダーより Ｃ２へ。
怪我人の着艦を許可する。》
「Ｃ２了解。」
そう言って海の方にある一隻の軍艦に着艦した。
「救護班！！急いでこいつの手当てをしろ！！」
すぐに救護班を呼びソラを預ける。
と、彼はまた空へと飛び立った。

数時間後、戦闘は一時収まった。
日本空軍の『ＳＤＦ－００２　ムラサメ』の実力を十分証明することも出来た。
そんな中、ツバサの着艦した軍艦のブリッジでは話し合いが開かれようとしていた。
「まだなのか？」

「焦らないで下さいよ。」
壁にもたれているツバサ。
その前には先程、ツバサと通信していたらしい男の人が。
「で、お前の連れとやらは大丈夫なのか？」
「まだ意識は醒めてないけど、大丈夫みたいです。」
「そうか。しかしだな、ツバサ。
お前からその子の力について聞いたが、納得出来ないことが一つある。」
「ただの友達です。」
ツバサの言葉に驚く男。
まだ聞いてもいないのになぜわかる？！
男が聞く前に返事を返した。
「おいおい、まだ誰もそんなことは言ってないぞ。
俺が聞きたいのは・・・・・」
「失礼する。」
「失礼する。」
二人の声がブリッジに響く。
「やっとお出ましか。」
ツバサの前にいた男が二人に近づく

「すまない。少々遅れてしまった。」
小柄の少女と身長の高いアメリカ軍人の二人が入ってくる。
その襟元の階級を示すマークに目をやる。
「ほう。大佐か。
一緒ではじゃないか。」
笑いをこぼしアメリカ軍人の肩を叩いた。
一瞬戸惑ったアメリカ軍人ではあったが、笑いにつられ自らも笑った。
「おっと失礼。」
距離を置き、気をつけをして敬礼。
「日本空軍極秘軍事組織所属の、レンベルト・レン・レベス大佐だ。
よろしく頼む。」
壁にもたれていたツバサもだらしなかった襟元を閉め、敬礼。
「同じく、ハヤミ　ツバサです。
よろしくお願いします。」
続いて小柄な少女が口を開く。
「こちらはアメリカ軍特殊強襲空軍部隊のラスティ・アーシュネビル大佐。
例の同盟の件で日本に来られた。」

ラスティは敬礼し、よろしく、とだけ言った。
本人はなにかにとまどっている様子。

「それと、レンベルト。
大佐を一時的にC小隊の一員にしといた。
アラスカに着くまでの間、大佐をよろしく頼むぞ。」

「りょうかいっ、艦長。」

か、艦長？
と言葉をもらすラスティ。

「ツバサ。大佐を部屋に案内してやれ。」

「はい。」

そのままツバサとラスティの二人はブリッジを出て行った。

「どんな風に大佐と接したんだ？
素の自分か？
それとも、小学生としての自分か？」

バカにでもするようにアゲハの方を向いて話した。

「な～に。いつもの私に決まっている。
第一、小学生の自分とは何だ。小学生とは。」

外見年齢１２歳、実年齢１２歳、身長約１４５センチ、スリーサイズは上から５０・４５・５２、体重３９キロ、好きな食べ物イチゴ、

嫌いな食べ物辛い物全般、好きなタイプ――――――――。

「ちょっとレン。
あんた今何考えてた訳？」

幼い声を大人っぽくしようと、無理しているのがあからさまに分かる。
部下になめられないように腕を組み偉そうにするが、可愛いげが増し逆効果。
相変わらずアゲハ本人は無自覚だが。

「いいえ、何も。」

そんなアゲハをレンはからかうのが好きなのだ。

「それよりアゲハ艦長。
いったいいつになったらその長い髪を切るんだ？」

「答える必要はない。」

艦長席に座ろうとするアゲハだが、席が高いためなかなか座れない。
ギロッ。
レンを睨む。
呼び寄せるように右手をクイクイ、と動かす。

「アゲハ艦長、おねだりわ？」

拳が飛んで来た。

「大佐、我々のことについて少し話をします。
アゲハ艦長に言われたことなので。」

「そ、そうか。
では、聞くとするか。」

初めて会話を交わす二人。
ブリッジエレベーターに乗ったときから二人の沈黙は始まった。
ただでさえ目つきの悪いツバサ。
初めて会った人にとってこれほど関わりにくい人はいない。
目を合わせただけでも恐ろしいというのに。

「ありがとうございます。」

敬礼。

「今から言うことは極秘レベル９の軍事事項です。
そのつもりで聞いて下さい。」

極秘レベル９。
最高レベルは１０まで。
今までの過去最大レベルは５までしか実在しない。
それを遥かに上回るレベル９。
覚悟を決め頷くラスティ。

「日本空軍極秘軍事組織、通称『Ａ．Ｆ．Ｓ．Ｆ．』。
内閣総理大臣ハナイ　リョウと、２０７８年にイギリス脱走兵として日本に亡命したレンベルト　レン　レベス大佐の二人によって設立した軍事組織です。
存在を知っているのは空軍の中でも数人しかいません。
そして、今我々のいるこの軍艦も見た目は他の軍艦と変わらないものの『Ａ．Ｆ．Ｓ．Ｆ．専属艦』です。
運航性能、迎撃性能等が他の軍艦をはるかに凌いでます。
他にも数多くの極秘事項がありますが、今日はここまでで終わります。
また話す必要がある事はこちらから連絡します。
少々早口になりましたが、大丈夫でしょうか？」

ツバサの話を聞いている内にラスティ大佐の部屋に着いてしまった。
本人はまだあまり分かっていないような様子。

「何か質問はありませんか？
なければ私はこれ……」

「ちょっと待て！」

「なんでしょう？
お答え出来ることであればお答えします。」

そう言ってまた先程の目つきでラスティ大佐を見る。
もう慣れたのか、それについてはあまり気にしなくなった。

「その～、なんていうか。

アゲハについてなんだが……。」

「ハナイアゲハ１２歳。
２０１２年５月１６日、夜宵学院を壊滅させた忌まわしき事件、以降『紅の刃』と略します。『紅の刃』により大きな損害を受けた日本は内閣総理大臣の権限に基づき、アメリカとの軍事同盟締結が許可されました。
その際、日本に残って指揮をとらなければならない総理の代わりに自らの娘を代理に、Ａ．Ｆ．Ｓ．Ｆ．の一員に任命しました。
子供の頃から専門的に訓練をうけさせていたらしく艦長の資格は十分にあると思われます。」

「１２歳で艦長……。
これはまたすごいなぁ」

あまり話を信じてなさそうなラスティ。
１２歳で艦長、そんな事例は一度も聞いたことがない。
外見上としとの艦長ならまだ分かるが、正式な艦長はさすがに信じられない。

「信じる信じないかは大佐の自由です。
では失礼します。」

ラスティに対し敬礼をしてその場を去ろうとする。

「待て待て！」

またツバサを呼び止める。

「最後にあと一つ聞かしてくれ。

君たちのことだ。」

「どうぞ。」

「一時的にC小隊に入れと言われたが、C小隊とは何のことだ？」

「コンバット小隊。
レン隊長と俺が組んでいる一個小隊です。
以上です。他には？」

さっきまでは詳しく説明していたツバサ。
今回はなぜか少し適当。

「乗っている戦闘機は？」

「極秘事項です。」

「えっ？」

「いずれ説明せねばならない時が来るはずです。
その時まではお話することはできません。
一つ言えることはガイノスに十分対抗できる兵器です。
では、用があるのでこれで失礼します。」

敬礼をしてその場を去る。
ラスティは部屋の扉の前で立ったまま、

「ガイノスに対抗できる兵器だと……。」

ガイノスと言えば、イギリスが作り出した歩行型奇襲戦闘兵器。

俗に言うロボットと言われるもの。
分厚い装甲に破壊力の高い武装。
十分といっていい程対抗できる兵器は今までにない。
それがこの日本にあるのだと言う。
それも自信たっぷりに言っていた。
ガイノスに対抗できる兵器・・・・・・。
いったい何なのだろう。
そう思いながら重い扉を開けてラスティは部屋に入って行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1968k/

Memory of the Sky

2010年10月8日21時27分発行